研　究　紀　要

水　産　部　会

研　究　協　議
　主題　「持続可能な社会の創り手を育てる、存在意義や価値の高い水産・海洋教育はどのようにあればよいか」
　【第２分科会】
　「生徒一人一人に寄り添う水産・海洋教育はどのようにあればよいか」
　　青森県立八戸水産高等学校　水産工学科教諭　　十文字　由美　・・・　1

学科別研究協議
　【資源増殖系】
　「水産食品系分野において、将来の産業界を支える人材育成を図るため、次の学習指導要領改訂に求められることは何か」
　　青森県立八戸水産高等学校　水産食品科教諭　　村﨑　匡利　・・・　4

講　　演　演題：「魚を獲る」から「価値をつくる」へ
　　～八戸の水産業と、これからの人材教育～
　　八戸水産価値向上実行委員会　会長　石井　駿吾　氏　・・・　7
　　八戸水産価値向上実行委員会　理事　佐藤　容紹　氏

総　　評　青森県高等学校教育研究会水産部会　部会長　後村　敏明　・・・　8

部　会　の　動　き　・・・

水　産　部　会

主題：「持続可能な社会の創り手を育てる，存在意義や価値の高い水産・海洋教育はどのようにあればよいか」
趣旨：生成ＡＩ等のデジタル技術が飛躍的に発展する一方，気候変動に伴う自然災害の激甚化，少子化に伴う担い手不足，不安定なグローバル情勢等，社会や経済の先行きに対する不確実性が高まっている。（参考 令和６年１２月２５ 日 文部科学大臣諮問文）よって，これまで構築されてきた水産・海洋教育は，変革を求められている。そこで，存在意義や価値を高め，国，都道府県及び地域で必要とされる水産・海洋教育のあり方について，社会のニーズを俯瞰する中で，柔軟かつ抜本的な視点も含め研究する。

第２分科会

発表者：青森県立八戸水産高等学校　水産工学科　教諭　十文字　由美

主題：持続可能な社会の創り手を育てる，存在意義や価値の高い水産・海洋教育はどのようにあればよいか。
副題：「 生徒一人一人に寄り添う水産・海洋教育はどのようにあればよいか 」
趣旨：令和４年１２月に改訂された生徒指導提要では，１「自己存在感の感受」，２「共感的な人間関係の育成」３「自己決定の場の提供」，４「安全・安心な風土の醸成」の４つの視点が示されている。生徒の多様化が一層進む中で，水産・海洋教育における専門教育を通じて，４つの視点を，どのように実現していくか，実践事例を共有・研究する。

１　はじめに

本校の教育は，『豊かな人間性と人格の形成を図り，有為な社会人，明るくたくましい水産人を育成する』という教育目標のもと，日々試行錯誤を重ねながら実践されている。校内実習にとどまらず，実習船『青森丸』による国際航海，地域企業と連携した商品開発，さらには産学連携による新たな栽培方法の研究など，多岐にわたる専門教育を展開している。これらの活動は，生徒一人ひとりが『社会の創り手』としての自覚を持ち，他者と協働する力を養う貴重な場となっている。今回は，改訂された『生徒指導提要』に示された４つの視点に基づき本校の水産・海洋教育における実践事例を紹介し，その教育的価値を共有したい。

２　４つの視点に基づく具体的実践

（１）「自己存在感」の感受（自分の役割を実感する）

学校行事においても自己存在感を実感する機会はあるが，水産高校におけるその本質は，各学科での海洋実習や工場実習，製造実習にあると考える。昨今，八戸水産高校では定員割れに伴う生徒数の減少（令和８年度全学年在籍数：海洋生産科９５名，水産食品科３９名，水産工学科３９名／各科定員１０５名）や物価高騰に直面しており，従来どおりの実習継続には困難も伴う。しかし，本校では環境や時代の変化に合わせて学科カリキュラムや実習形態を柔軟に見直し，教育の質を落とすことなく対応している。

具体的には少人数化の利点を活かし，教員が一人ひとりの生徒へ個別対応する時間と機会を大幅に増やした。

例えば，水産食品科では，従来の学年単位（約３５名想定）での缶詰実習が人数不足により困難となったことを受け，全学年合同での製造実習へと切り替えた。これにより，生徒は自身の役割にこれまで以上に集中し責任感を持つようになっただけでなく，異なる学年の仲間と協働する中で社会性や協調性を育む良い機会になっている。

また，水産工学科では，学年ごとの実習を維持しつつ，従来の機関実習や溶接実習の内容，時間数を見直し精査した。それにより教員がマンツーマンで指導できる時間が増えたことで，より専門的かつ技術的に高度な内容を組込んだカリキュラムの実施が可能となった。







左上　海洋生産科　航海当直
右上　水産食品科　缶詰実習
左下　水産工学科　機関実習

このように柔軟な対応を重ねることで，１年次から３年次までの成長過程において，生徒が実習内での自身の役割を明確に理解し，主体的に判断・行動できる場面を増やしている。航海実習や製造実習における「持ち場」の責任を全うさせる経験は，「自分が欠ければ全体の作業が滞る」 という切実な実感を伴う。自分の作業が「安全な航海」「美味しい製品の完成」「機械の安全な運転」といった目に見える成果に直結することが，生徒の有用感（自分は役に立っているという感覚）を強く意識させ成長へつなげている。さらに，新たな試みとしてＳＮＳ（Instagram） を開設し，生徒の活動風景を積極的に発信している。これは，普段は見えにくい生徒のひたむきな姿勢を保護者へ届けるだけでなく，地域社会や外部機関に対する水産教育の認知度向上を目的としている。アカウント開設後，アクセス数は着実に伸びており，外部からの評価が可視化されることは，生徒自身の自信と自己存在感の更なる向上に寄与している。また，生徒や保護者が日常的に目にする媒体特性を活かし，非常時における迅速な連絡手段としても機能させている。

また，伝統的な教育方法に新たなシステムを融合させる「不易流行」の精神を大切にしながら，生徒一人ひとりに寄り添い，自己存在感を高める教育を今後も推進していきたい。







（２）「共感的な人間関係」の育成（仲間と通じ合う）

勤務中，日頃の対話や観察を通じて，現代の生徒は屋外での活動よりも，自宅でのゲームやＳＮＳを介した限定的なつながりを好む傾向が強まっていると実感する。こうした状況下において，本校独自の学校行事や専門実習は，希薄になりがちな人間関係を再構築し，共感的な人間関係を育成する極めて貴重な機会となっている。

地域連携の事例としては，八戸高等支援学校の生徒や地元・鮫町内会の方々と合同で実施する「八水クリーン作戦」が挙げられる。八戸港内や海岸線の清掃活動を共に行う中で，生徒たちは地域社会の一員としての自覚を持ち，異なる背景を持つ他者と目標を共有して協力し合う重要性を学んでいる。この活動を通じ，生徒の意識には確かな変化が見られるようになった。地域住民への挨拶が自発的に行われるようになったほか，校内でも「ペットボトルのラベルを剥がす」「中をすすぐ」 といった，分別の徹底やゴミ処理に対する高い意識が定着しつつある。これは，清掃活動を通じて「他者や社会への配慮」が自分事として捉えられた結果であると言える。

また，１年次の体験航海や２年次の実習船「青森丸」による長期航海実習は，共感的な人間関係を育む最良の場である。船酔いという慣れない環境に苦しみ，閉鎖的かつ厳しい自然条件下での共同作業を求められる中では，互いの個性を認め合い，助け合わなければ乗り越えられない。意見の相違や衝突を経験しながらも，共通の目的地（ゴール）へ向かうプロセスは，単なる表面的な仲の良さを超えた深い信頼関係を構築させている。

さらに，コロナ禍で中止を余儀なくされていたハワイ・ホノルルへの寄港地研修も再開されたことで，生徒たちは互いに協働して知識を寄せ合い，現地の方々とコミュニケーションを図りながら，異文化交流や自主研修を遂行していった。この経験は生徒に大きな度胸や粘り強さを育み，人間的に一回りも二回りも成長させる機会になった。





このような「逃げ場のないリアルな現場」での経験を積み重ねることで，生徒の中に確固たる協働の意識を根付かせることが可能となる。今後も時代に合わせて指導方法を柔軟に変化・対応させながら，多様な人々と協調

して関わることができる「生きる力」を身につけさせていきたい。

（３）「自己決定」の場の提供（自分で考え，選択する）



本校では，生徒が自らの進路や学習課題を主体的に選択できる「自己決定」の場を段階的に設けている。昨年は，「漁師. JP」や地元漁業関係者，他地域の漁業会社と連携した「船と漁業を知る授業」を実施し，漁業に就職する可能性がある海洋生産科と水産工学科の全学年が参加した。漁業の最前線や実態に直接触れることで，自らの将来を現実的な進路の選択肢として捉え直す機会としている。また，１年次の「あおもり創造学」では，水産や青森県に関連した探究活動を開始し，３年次の「課題研究」への足掛かりとして，早い段階から自己決定の意識を醸成している。こうした積み重ねがあり，３年次の「課題研究」において，生徒は地域課題（ウニの養殖やブランド魚（アブラメ）の活用，新しい缶詰の商品開発）や環境問題（太陽光発電によるゴーカート走行等）に対し，自らアプローチ方法を選択し，主体的に取り組んだ成果を研究発表として残すことができた。ここで重要なのは，教員が安易に正解を与えるのではなく，失敗を許容する環境の中で試行錯誤を繰り返させることである。このプロセスこそが，確かな意思決定能力を育んでいる。近年，この課題研究を通じて特定の分野への興味・関心を深め，それを自らの進路決定の指針とする生徒が増加している。「あおもり創造学」を起点とした一連の探究活動を今後も充実させ生徒の自己決定能力を一層引き出していきたい。

（４）「安全・安心な風土」の醸成　　（生徒が安全と思える場所の提供）

水産教育における「安全」は，生徒の命に直結する最優先事項である。本校の実習指導では，常に適度な緊張感を保持させ，服装の乱れや不注意な行動がないよう，指導を徹底している。この「メリハリ」のある指導を徹底することで，重大事故やミスの削減に繋げるだけでなく，生徒自身が「ルールを守ることが自分たちの身を守る」という安全意識を内面化するよう努めている。



また，近年の地震等の自然災害に対しても，学校全体で迅速な対応を心掛けている。先日の震度５弱の地震発生時には，駅で立ち往生していた生徒を迅速に避難場所へ誘導し，安全を確保した。こうした緊急時における教職員の迅速かつ誠実な対応の積み重ねが，生徒や保護者との間に「この学校なら守ってくれる」という深い信頼関係を築き，心理的な安心感をもたらしている。

物理的な安全管理を徹底しつつ，生徒が安心して学びに集中できる「心の安全基地」としての風土を醸成することは，存在意義の高い専門教育の基盤である。今後も，生徒の安全を第一に据えた指導と，一人ひとりに寄り添う支援を両立させていきたい。

３　おわりに ―存在意義の高い水産・海洋教育を目指して―

持続可能な社会の実現には，専門的な知識のみならず，確かな「責任感」と「協調性」を備えた人材が不可欠である。水産・海洋教育という，自然の厳しさと恵みに直接触れる特殊な学びの場において，前述した「４つの視点」を意識した指導を展開することは，生徒を単なる「産業の担い手」としてだけでなく，未来をより良くしようとする「価値ある個」として育てることに直結すると確信している。

これらの教育実践において，生徒自身が「当事者性（エージェンシー）」を持ち，主体的に行動することで，その成長はより一層大きなものとなる。日々の学習や実習，そして私生活におけるあらゆる事象を「他人事」ではなく「自分事」として捉え，行動できる力を養うことが重要である。

本校での実践を経て，生徒たちがそれぞれの豊かな未来を築き，持続可能な地域社会の担い手として羽ばたいていけるよう，今後も試行錯誤を重ねながらより良い教育活動となるよう努めていきたい。

学科別研究協議

青森県立八戸水産高等学校　水産食品科　教諭　村﨑　匡利

主題：水産食品系分野において，将来の産業界を支える人材育成を図るため，次の学習指導要領改訂に求められることは何か。
趣旨：少子化が進み，志願者確保が課題となる中，中学生が興味をもって入学するとともに，産業界から評価される人材を育成するための学習内容はいかにあるべきか。新しい時代に向けた水産食品系分野の発展につながる指導項目について調査・研究する。

１　はじめに



本校は「海・水産物・船のスペシャリスト」の育成を目指す青森県唯一の水産高校である。海洋生産科（航海システムコース・漁業システムコース），水産食品科，水産工学科，専攻科（漁業科・機関科）を設置している。青森県の太平洋側に位置し，「豊かな人間性と人格の形成を図り，有為な社会人，明るくたくましい水産人の育成」を教育目標に掲げ，地域社会に密着し，水産業発展の原動力となって着実に歩み続け，国内はもとより，世界の海を駆け巡る数多くの人材を輩出してきた。今年度創立１１８周年を迎えた。

近年の状況としては，令和２年度から，校舎の大規模改修工事が行われ，教室棟，実習棟がリニューアルされ校舎の色も暖色系に，校舎内は白を基調とした明るいものとなった。また，令和５年度には，大型実習船「第７代青森丸」が竣工し，長期国際航海，沿岸航海体験航海等，有効に利用されている。

次期学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会の論点整理において探究的・実践的な学びの積み重ねや深まりを意識できる構造への改善が指摘されており，多様な課題に対応できる探究的・実践的な力を育成するための学びの積み重ねが十分でない。また，職業人として身につけるべき資質・能力を踏まえた授業展開が十分でないとの指摘がある。このことから，産業界のニーズに把握したうえで本校のこれまでの教育活動について一考する。

２　八戸市の水産加工業の現状

八戸市の水産加工業は，豊富な漁獲量を基盤に発展してきたが，近年は資源減少や海洋環境の変化により原料確保が困難となっている。加えて人手不足や高齢化，価格高騰も課題である。今後は養殖の導入や高付加価値化により，安定的で持続可能な産業への転換が求められている。こうした状況の中で，また，加工分野においても高付加価値化やブランド化，輸出拡大などを通じて競争力強化を目指す必要があるとされている。

以上のような産業現場の課題と本校において，身に着けるべき資質，能力の関係を整理すると以下のようになると推察する。

課題	身に着けるべき資質・能力
人材不足	職業資格の取得と専門知識の定着(資格取得・各種コンテストへの応募)
高付加価値化・ブランド化	商品開発・商品コンセプトの立案(課題研究)
食品の安全性の確保	HACCP 等の衛生管理(資格取得)

※上記のような食品関連産業の要望に対し，本校の教育活動を課題研究・資格取得の面から評価した。

３　これまでの課題研究の指導より

（１）　課題発見

産業界の課題として漁獲量の減少から，加工業者としては一次加工(冷凍貯蔵，冷凍保管)から二次加工して付加価値を高めた商品開発への移行が検討されている。商品開発には消費者ニーズの把握と商品アイディアの創出が重要であるため，必ず話し合いから始める。話し合いに当たって指導することは消費者ニーズの調査と水平思考である。水平思考とは以下のとおりである。

> 水平思考とは，固定観念や常識にとらわれず，さまざまな角度から自由に発想して問題を解決しようとする考え方である。普通の思考は，論理的思考であり，道筋を立てて順序だてて解決しようとする考え方である。その発想は以下のとおりである。
> ○代用・・・製品の要素を取り除き，別の要素に置き換えること(電気自動車)
> ○結合・・・製品の要素を保持しつつ，新たに別の要素を加えること(ラジカセ)
> ○逆転・・・製品の要素を否定すること(レンタル自転車，立ち食いソバ)
> ○除去・・・製品の要素を取り除くこと(カット野菜，電子書籍)
> ○強調・・・製品の要素を極度に拡大もしくは縮小すること(薄型テレビ，携帯音楽プレーヤー)
> ○並べ替え・・・製品に関連する要素の時間的な前後関係を並べ替えること(図書カード)

（２）これまでの研究テーマ

○アブラメの加工品開発（平成 31 年度～令和２年度）

この研究は，階上町が制定する町の魚「アブラメ」ブランド化に向けた町との共同研究である。メンバーで消費者ニーズを調査し，利便性と簡便性を付与した調味漬け商品(塩麹漬け，醤油麹漬け，味噌漬け，酒粕漬け)に加工した他，継続研究でアブラメの冷薫製品の製造に取り組んだ。

この研究活動においては，三枚おろしにすることで利便性が向上している。また，調味漬けにしたことで簡便性が向上している。これらは除去の思考により骨を取り除き，代用の思考により多くの調味加工品に仕上げたものである。



試作した調味漬けの試作品



アブラメの冷薫試食風景

○ 鶏節の開発（令和６年度～現在）

この研究は，昨今のカツオの漁獲量減少，原材料の価格高騰という課題に対し，畜養が確立している鶏肉，中でも脂肪の少ない鶏ムネ肉を節に加工する研究に取り組んでいる。この研究では代用の思考により，提案された研究である。現在試行錯誤を繰り返し，荒節まで辿り着いたところであるが，この後カビ付けし枯節に仕上げるまで試行錯誤を続けたい。



焙乾風景



鶏節と鰹節の比較

継続研究において，スタート時点での課題は既に明確になっている。そのためＰＤＣＡサイクルを活用して継続的な改善を繰り返すことができた。そのため生徒たちから評価と評価を基にした改善点が提案されるといった深い学びにつながったと考えられる。

本研究では地元企業であるプライフーズと連携して原材料の調達から評価まで協力していただいた。これにより地元企業に対する生徒の理解も図られたと考察している。また，鰹節の生産量減少とともに古き良き文化が継承されなくなることも問題となることを考えると畜肉で節を完成させることは古き良き伝統の継承にもつながると考えている。

４　資格取得について

（１）本校水産食品科では３年間で取り組む資格取得，取得可能な資格について

食品技能検定１類・２類・３類，ＨＡＣＣＰ基本技能検定，小型ボイラー取扱業務特別教育，第一種圧力容器取扱作業主任者技能講習，第三種冷凍機械責任者，ビジネス文書検定，危険物取扱者，フォークリフト運転技能講習

（２）主格取得に取り組むメリットと身につくスキル

資格取得は，以下のようなメリットやスキルが身につくと考えている。

○専門分野への興味・意欲の証明になる　○学習意欲・自信の向上につながる
○社会で役立つ実践力が身につく　○計画力・自己管理力が向上する
○継続力・忍耐力が身につく　○問題解決力が身につく
○専門知識・実務スキルが身につく

これらのスキルは，産業人として必要とされるスキルであり，学習活動としての教育効果も高いと考えられる実際に就職の際多くの資格試験や検定に合格した生徒を採用する傾向にある。そのため，本校の過去の就職先から考えられる就職先検証してみた。

小型ボイラー・・・食品工場，その他の製造工場，病院，学校，ホテル，介護福祉施設など
第一種圧力容器取扱作業主任者技能講習・・・化学・石油関連企業，食品・飲料メーカー，公共施設・インフラなど
第三種冷凍機械責任者・・・食品工場，冷凍工場，物流・冷蔵倉庫，スーパー・小売など

５　各種コンテストへの応募

企業が各種コンテストを実施するメリットには，人材発掘，企業ＰＲ・ブランド向上，新しいアイディアの獲得，市場理解・若者のニーズ把握，社会貢献（ＣＳＲ活動）がある。これらに応募することで生徒たちは課題に取り組むことで専門知識や技術が身につく(自己の成長)，実績・評価につながる，自分の得意分野・興味関心が明確になる(自己理解・進路選択に役立つ)，他校の生徒や社会人，企業と接点が持てるほか，フィードバックをもらうことで視野が広がる，結果に関わらず挑戦経験が自信につながる，成功体験や失敗経験が「次の行動力」になると評価している。



ホタテと野菜の玄米スープレシピコンテスト表彰式の様子



マルちゃんスマイルフードプロジェクト表彰式の様子

６　まとめ

新学習指導要領改訂の論点において，産業教育の具体的方向性として，①市場環境や業態変化に柔軟に応えられる力の育成，②データサイエンス，ＡＩを活用した学びの充実，③探究的，実践的な学びの積み重ねや深まりを意識できる構造に改善する，④分かりやすく使いやすい指導要領の作成，⑤専門高校がさらに発展充実していくために必要な条件の整備の５項目が挙げられている。これらを実現するために柔軟な教育課程の編成が必要になるが，これまで取り組んできた課題研究や資格取得の教育効果が評価できることから，今後も積極的に取り組めるようなカリキュラムマネジメントが必要となる。また，現行の学習指導要領は，体験重視型の授業に重点が置かれている。新学習指導要領改訂では，価値創造型の授業が求められており，これまでの教育活動が，より積極的に展開できるようになるだろう。

演題　「魚を獲る」から「価値をつくる」へ　～八戸の水産業と、これからの人材教育～
講演　　講師　八戸水産価値向上実行委員会（シン八戸）　会長　石井　駿吾
　　講師　八戸水産価値向上実行委員会（シン八戸）　理事　佐藤　容紹

八戸の水産業は、かつて日本有数の水揚げを誇っていましたが、現在は、水揚げ量減少、人口減少、後継者不足、そして、情報発信不足といった深刻な課題に直面しています。しかし、単に「魚が獲れないこと」だけが問題ではなく、「価値を作る人」が不足していることこそが真の課題であると感じていました。そこで、八戸の魚を知ってもらいたいという想いで、各業種に人間が連携して八戸水産価値向上実行委員会（通称：シン八戸）を立ち上げました。

これまでの水産業は「獲る」ことが主体であり、漁師と魚屋、加工業者、飲食店のバリューチェーンの中で情報が分断されていました。漁師は魚を水揚げして市場に下ろすだけで終わってしまい、自分たちが施した丁寧な手当て（神経締めや血抜きなど）が最終的にどう評価されたかを知る術がありませんでした。シン八戸の活動は、この断絶を解消し、関係者が共通の課題意識を持って連携することから始まりました。

かつて八戸の定置網漁の収益の９割を支えていた秋鮭は、現在はピーク時の１％以下にまで激減し、代わりに南方系のカンパチやハタなどが獲れるといった劇的な環境変化が起きています。こうした中、サクラマスの神経締めなどの高付加価値化に挑戦しましたが、当初は市場から「傷物」として安く買い叩かれるという苦い経験をしました。しかし、シン八戸のネットワークを通じて飲食店や魚屋と直接対話し、フィードバックを受けることで、漁師のこだわりが適正に評価される仕組みを構築しました。また、人材育成の観点では、漁師は「毎日決まった時間に帰宅できる」という特性を持ち、家族との時間を大切にしたい現代の若者にとって「働きやすい職業」になり得ることを強調するとともに、若者が働きやすい環境作りを自らで実践しています。

シン八戸が展開する具体的な施策とブランド戦略は多岐にわたります。

新幹線輸送の実現：ＪＲ東日本と１年半に及ぶ交渉を重ね、朝獲れの魚を新幹線で輸送し、その日の夕方には首都圏の飲食店に届ける仕組みを構築しました。４０秒という短い停車時間の中で荷積みを行うなど、物流の限界に挑んでいます。

「わんどの魚」ブランド：特定の魚種（サバやイカなど）に限定せず、八戸の豊かな海で獲れ、漁師が責任を持って手当てした魚を「わんどの魚」としてロゴマークを付け、八戸産の新鮮で信頼のおけるブランドとして展開しています。

多産業連携のプロモーション：魚だけでなく、ニンニクやワイン、せんべいなどの加工品、八戸の特産品を「総攻撃」で首都圏へアピールする「八戸フェア」を実施し、地域全体の認知度向上を図っています。

食育と教育：地元の小学校での講演や、首都圏の子供たちを招いた漁業体験イベントを通じ、次世代に魚食文化と水産業の魅力を伝えています。子供たちを「未来からの留学生」と捉え、彼らが将来を悲観することなく、変革の波を乗り越えられる武器（思考力や技術）を身につけることが大人の役割であると考えています。特に、学校給食における「魚離れ」を懸念し、子供たちが最初に触れる魚の質や提供方法を変えることで、新たな食文化を形成したいと考えています。

最後に、水産教育に携わる教員に対し、水産現場と学校、そして地域が一体となって、「 ただ魚を獲るだけでなく、いかに社会の変化に対応し、自ら価値を創出できる人材を育てるか」という視点の教育が重要であり課題となります。また、八戸の水産業は、既存の仕組みに頼るだけでは維持できない変革の時代にあります。しかし、シン八戸の取り組みが示すように、漁師が加工や流通までを視野に入れ、多くの人との信頼関係を築くことで、新たな経済的・精神的な活性化が可能になります。水産教育が目指すべき方向性として技術の習得に留まらない「価値創造」の姿勢を提案したいです。

総評　　部会長：青森県立八戸水産高等学校　校長　後村　敏明

第１分科会での「主体的・対話的で深い学び」、第２分科会での「生徒指導の４つの視点」、学科別協議での「産業界から評価される人材育成」など、各校の実践報告は非常に有意義なものでした。来年度の発表においても、単なる取り組みの紹介に留まらず、その取り組みに対する「検証」と「生徒の資質・能力がどのように変容したか」という成果を意識した調査研究を期待します。結びに、本会を通じて得られた研究成果や実践事例を共有し、教員一人ひとりの指導力向上、および水産教育のさらなる発展に繋げていくことを期待しています。

部　会　の　動　き

自　令和　８年　４月
至　令和　９年　３月

令和８年５月７日（木）
　青森県高等学校教育研究大会水産部会総会を実施。　　於：八戸水産高等学校

令和８年６月１８日（木）～１９日（金）
　全国高等学校水産教育研究会東北地区大会を実施。　　於：岩手県宮古市

令和８年８月６日（木）～７日（金）
　第６２回全国高等学校水産教育研究会全国大会を実施。　　於：茨城県水戸市

令和８年８月１８日（火）
　青森県高等学校教育研究大会水産部会を実施。　　於：八戸水産高等学校
　　午前　東北大会・全国大会の報告会を実施。
　　午後　記念講演・教育懇談会を実施。
　　講師　八戸水産価値向上実行委員会
　　会長　石　井　駿　吾　氏
　　理事　佐　藤　容　紹　氏

研　究　テ　ー　マ

紀要(集)	年度	研　究　テ　ー　マ	会　　場	会員数	大会参加数	大会発表者数
64	1	・各校の特色を生かし、水産・海洋教育を活性化させる地域産業との連携はいかにあるべきか ・新学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒の資質能力を伸ばすための水産・海洋教育はいかにあるべきか	八戸シーガルビューホテル	28	27	2
－	2	・水産・海洋高校におけるカリキュラム・マネジメントの推進はいかにあるべきか ・新学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒の資質能力を伸ばすための水産・海洋教育はいかにあればよいか	新型コロナ感染防止対策のため中止。 研究テーマは来年度へ順延。	29	―	―
65	3	・水産・海洋高校におけるカリキュラム・マネジメントの推進はいかにあるべきか ・新学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒の資質能力を伸ばすための水産・海洋教育はいかにあればよいか	青森県立八戸水産高等学校八水高会館会議室	29	27	2
66	4	・水産・海洋高校におけるカリキュラム・マネジメントの推進はいかにあるべきか ・新学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒の資質能力を伸ばすための水産・海洋教育はいかにあればよいか	青森県立八戸水産高等学校八水高会館会議室	29	28	3
67	5	・水産・海洋高校における令和の日本型学校教育はいかにあるべきか ・Society5.0に向けた水産・海洋教育はどのようにあればよいか	青森県立八戸水産高等学校八水高会館会議室	31	29	2
68	6	・水産・海洋高校における令和の日本型学校教 育はいかにあるべきか ・水産・海洋高校の『新時代の教師像』はいかにあるべきか	青森県立八戸水産高等学校八水高会館会議室	30	24	3
69	7	・新しい時代をリードする、創造的な水産・海洋教育はどのようにあればよいか	青森県立八戸水産高等学校八水高会館会議室	28	21	2
70	8	・持続可能な社会の創り手を育てる、存在意義や価値の高い水産・海洋教育はどのようにあればよいか	青森県立八戸水産高等学校八水高会館会議室	29	26	2